

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770241

研究課題名（和文）近代中国ムスリムのクルアーン解釈 王静齋『古蘭経譯解』の研究

研究課題名（英文）An interpretation of the Qur'an by a Chinese Muslim in the modern era

研究代表者

中西 竜也（Nakanishi, Tatsuya）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：40636784

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：近代に活躍した著名な中国ムスリム学者、王静齋が著した、コーラン（クルアーン）の漢語注釈、『古蘭経譯解』の内容を、その典拠となったアラビア語・ペルシア語のコーラン注釈と比較しつつ検討し、とくに次の二つの点を明らかにした。第一に、当該漢語注釈書においてその中国ムスリム学者は、聖戦や、それによって防衛すべきウンマ（ムスリム共同体）についての教説を、近代の中国社会やイスラーム世界の歴史的諸状況に応じて、どのように表現したか。第二に、近代イスラーム世界でしばしば批判にさらされた、スーフィズム（イスラーム神秘主義）、とくに聖者崇拜をめぐる問題を、どのように語ったか。

研究成果の概要（英文）：I examined a Koranic exegesis written in Chinese by a famous Chinese Muslim scholar flourished during the modern era, named Wang Jingzhai, comparing it with Arabic or Persian interpretations he consulted. Then, I elucidated the following two issues: First, how does the Chinese Muslim scholar in this Chinese exegesis express doctrines regarding the holy war and the Umma (the global Muslim community) defended by it, in accordance with historical conditions of the Chinese society and Islamic world during the modern period? Second, how does he state his view about Sufism, particularly the saint worship, that was often criticized in the Islamic world during the modern period?

研究分野：中国イスラーム史

キーワード：アジア・アフリカ史

### 1. 研究開始当初の背景

中国ムスリムは、中国の社会的現実や思想的潮流と対話し、西南アジア由来の新しいイスラーム思想に反応しつつ、イスラームをいかに再解釈・展開してきたか？ この問題は、歴史上に実践されてきた文明間対話の具体相を問うものとして、国内外の多くの研究者の関心を集めている。その問題をめぐる前近代の諸相については、比較的多くのことが解明されつつある。たとえば、Sachiko Murata, et al., *The Sage Learning of Liu Zhi: Islamic Thought in Confucian Terms* (Massachusetts-Cambridge and London, 2010)や、申請者も参加する中国イスラーム思想研究会の発行する『中国イスラーム思想研究』1-3号(2005-2007年)は、中国ムスリム学者、劉智(1724年以降没)の『天方性理』の訳注を提示するなかで、彼がイスラームと中国伝統思想との架橋から、「中国的」イスラームをいかに再構築したかの一端を浮き彫りにしている。また、松本耿郎氏の一連の研究や、拙著『中華と対話するイスラーム——17-19世紀中国ムスリムの思想的営為』(京都大学学術出版会、2013年)も、劉智やその他の中国ムスリム学者たちによる、イスラームの再解釈・中国的展開の諸相を論じている。拙著は、たとえば、近代のとば口に活躍した、馬徳新(1874年没)や馬聯元(1903年没)といった学者が、中東のイスラーム改革思想の影響を受けつつ、離婚や聖戦をめぐるイスラーム法の規定と中国的現実との矛盾解消のために、イスラーム法の再解釈に尽力していたことを指摘した。

いっぽう近代、とくに中華民国時代以降についても、当該問題の関連研究として、松本ますみ「中国イスラーム新文化運動とナショナル・アイデンティティ」(西村成雄編『現代中国の構造変動3 ナショナリズム——歴史からの接近』東京大学出版会、2000年)がある。同研究によれば、近代中国の代表的なムスリム学者、王静齋(1879-1949)は、折しも西南アジアで盛り上がりを見せていたイスラーム復興運動に想を得て、愛国思想をイスラーム信仰の一環とする解釈を提唱し、中国における国民統合の推進に共鳴した、という。

しかし、これ以外に、近代の中国ムスリムによる、中国の社会的・思想的趨勢や西南アジアの知的動向に応じたイスラームの再解釈・展開の実相は、ほとんど明らかにされていない。

たとえば、前掲の拙著『中華と対話するイスラーム』で扱ったような、中国ムスリムによるイスラーム法と中国的現実の矛盾解消をめぐる法的解釈努力が、中華民国時代以降どのように展開されたかは、ほとんど研究されていない。西南アジアにおけるイスラーム法学者たちの、近代化や世俗化にたいする知的応答が重要な問題としてしばしば取り上げられることからすれば、中国ムスリムにも

この種の議論は必要だろう。加えて、中国ムスリムによるイスラーム法の再解釈の営為を正確に理解するためには、西南アジアのムスリム学者たちによる、近代化への対応をめぐる思想的営為の影響を、同時に検討する必要があるだろう。

また、勉維霖主編『中国イスラーム宗教制度概論』(寧夏人民出版社、1997年)や、馬斌「肅徳珍与伊赫瓦尼教派」朱崇礼主編『伊斯ラーム文化研究』(寧夏人民出版社、1998年)などは、近代中国のイスラーム改革主義勢力、イフワーン派が、中国の近代化や西南アジアのイスラーム改革運動に反応して、伝統的中国イスラームを改革した様子を、ある程度具体的に論述してはいる。しかしながら、同派の改革が、西南アジアの数あるイスラーム改革運動のいずれに端を発し、どのような影響を受けて派生してきたかは、いまだ究明されていない。加えてイフワーン派の改革が、近代化を目指す中国の世相と具体的にどのように連動するのかも、十分に吟味されているとはいえない。とりわけイフワーン派の重鎮で、先にも言及した王静齋は、中国イスラームの近代化運動と関わりが深いが、彼のイスラーム改革が、中国の近代的現実への対応という文脈とどのように絡んでくるのか、具体的には不明である。イフワーン派は、対抗する保守派のカディーム派とともに、近代の中国ムスリム思想界を二分した一大勢力であるにもかかわらず、その実像が依然不鮮明であるという意味からも、以上のような問題の考察は重要である。

### 2. 研究の目的

近代中国ムスリムの代表的学者で、イフワーン派の重鎮でもあった王静齋(1949年没)が、中国の現実や西南アジアの新思想にどのような応答をなし、いかなるイスラームを再構築・展開していたかを検討する。それによって、中国ムスリムによる文明間対話実践の一端、とくにその近代的様相の一端を明らかにする。より具体的には、次の二つの問題に焦点をあてる。

第一に、王静齋は、イスラーム法と中国的現実の矛盾をいかに解消したか。たとえば、聖戦に関するイスラーム法の規定をめくって、王静齋はどのような解釈を採っていたか。

第二に、イフワーン派は一般に聖者崇拜やそれと結びついたスーフイズムを厳しく批判したことで知られるが、王静齋自身は、それをどのように考えていたのか。

### 3. 研究の方法

以上の二つの問題を、王静齋の主著『古蘭經譯解』(クルアーンの漢語訳注)から読み解く。すなわち、『古蘭經譯解』の、聖戦や聖者崇拜に関連する記述を、王静齋が参照していたアラビア語・ペルシア語のクルアーン注釈やその他のイスラーム文献と比較する。それによって、どの解釈がどの典拠(どのよ

うな思想的派別)から採用され、どの典拠のどの解釈が却下されたか、あるいはどの解釈が彼の独自のものが、を確認する。そのうえで、彼がいかなる歴史的背景や思想的潮流への応答として、特定の解釈を採用したかを探る。

#### 4. 研究成果

##### 【1】

『古蘭經譯解』における聖戦をめぐる解釈として、それと密接に関わるウンマ umma (ムスリム共同体)についての記述を分析した。そしてその成果を、2015年1月14日に National University of Singapore で開催された国際学会、Wild Spaces and Islamic Cosmopolitanism in Asia において口頭発表した[学会発表]。また、その際に提出したフルペーパーをもとに原稿を作成し、現在出版計画中の論文集に寄稿した。その概要は以下のとおりである。

第一に、『古蘭經譯解』の三つの版本(1926年ごろ完成の甲本、1937年から38年にかけて作成された乙本、1938年作成開始、1946年刊行の丙本)を、そのアラビア語・ペルシア語原典と比較しつつ、王静齋のウンマに関する観念を析出した。まず、『古蘭經譯解』の典拠の一つ、バイダーウィー(al-Bayḍawī, d.1286)のクルアーン注釈『啓示の諸光と解釈の諸神秘(Anwār al-tanzīl wa asrār al-ta'wīl)』(第23章第52節の注釈部分)は、ウンマを「統一された教え」と「単一の共同体」の意味で解しているにもかかわらず、『古蘭經譯解』の三版はいずれも、ウンマを「統一された教え」の意味に限定して翻訳していることを明らかにした。そして、この差異は、王静齋が、中国ナショナリズムへの配慮から、国民国家の枠を超えて全世界のムスリムを一つの共同体(ウンマ)と表明することを忌避した結果である、と結論づけた。

また、『古蘭經譯解』の甲本と乙本は、第3章第110節に現れる「ウンマ」の語を「民族」と翻訳している一方で、丙本はそれを「群衆」と翻訳していること、その差異もまた、中国ナショナリズムへの配慮の結果であったこと、とくに1939年7月に、蔣介石が中国ムスリムを「回族」という一つの民族と見なすことを禁じたことに呼応するものであったと論じた。

なお、中国では、20世紀初頭においてすでに、汎イスラーム主義(当時は、オスマン朝のスルタン・カリフの権威下にウンマを統合しようとするそれ)が知られていた形跡がある[図書]

第二に、『古蘭經譯解』の三つの版本から、彼の「イスラームの家」に関する言説の変遷を確認した。まず、クルアーン第4章第97-99節の注釈部分で、乙本と丙本は、中国を「回教國」とし、そこからの「移住」を不必要とするが、この解説は甲本には見えない、ということ指摘した。そして、この変遷は、王

静齋が、中国ムスリムのあいだで唱えられていた抗日戦争を「防衛ジハード」とする言説に呼応して、中国を「イスラームの家」とみなそうとしたことを意味する、と結論づけた。

なお、1905年に中国ムスリム学者、馬安義によって著されたアラビア語作品『信仰の確定(Tahqīq al-īmān)』では、中国は「戦争の家」とされている(それゆえに中国ムスリムにとっては清朝皇帝に服従することが義務となると論じられる)[雑誌論文;学会発表;図書]。王静齋が中国を「イスラームの家」としたのは、中国ムスリム思想上、新しい展開であった。

以上まとめると、次のように言える。すなわち、日中戦争中に作成された王静齋『古蘭經譯解』乙本・丙本では、中国ムスリムに、「中華民族」の一員として抗日戦争に積極参加することを鼓舞するために、中国が「イスラームの家」とされ、抗日戦争が「防衛ジハード」と位置付けられた。いっぽうで、本来「防衛ジハード」によって守られるべき「イスラームの家」の領有者であるウンマ(国民国家の枠を超えたムスリム共同体)の存在は、中国ムスリムの「中華民族」への排他的帰属を危うくするものとして曖昧化された。

以上に加えて、近代中国ムスリム知識人が執筆・購読した代表的な定期刊行物『月華』の分析から、王静齋によるクルアーン翻訳・注釈を、当時の中国ムスリムの言説空間に位置づけることを試みた。結果、『月華』では、蔣介石の同化政策が顕著となる1939年7月以降、それに対抗するかのように、中国ムスリムを、国民国家を超えたムスリム共同体(ウンマ)の一部とするような言説が現われるようになることが判明した。すなわち、ムスリム共同体を帝国主義から防衛する方法として、中国ムスリムと世界のムスリムの直接的連携が主張され、その最初のステップに抗日戦争が位置づけられるようになるのである。そして、このような当時の論調に照らせば、王静齋は、ムスリム共同体の存在を認めなかった点で際立つことが明らかとなった。

##### 【2】

[学会発表]の後、その議論を補強する、以下のような成果を出した。

(1)日中戦争以前に刊行された『古蘭經譯解』甲本では、ウンマが「民族」と訳されていた。これが選択的・意識的な翻訳であったこと(つまりは、乙本・丙本でウンマが「民族」と訳されなかったことも選択的・意識的な措置であったこと)を、先行するクルアーン漢訳、鐵錚『可蘭經』や姫覺彌『漢譯古蘭經』、およびその原典となった坂本健一の和訳やRodwellの英訳との比較から明らかにした。[学会発表]

(2)また、王静齋が主宰した定期刊行物『伊光』にも、世界中のムスリムを「中華民族」に比肩するような一つの「民族」とみなすこ

とへの反対意見がみえること、つまりはトランス・ナショナルなウンマの存在を曖昧化するような言説がみえることを指摘した。[ 図書 ]

### 【3】

王静齋のウンマ理解を相対化すべく、前近代中国ムスリムのウンマ観念についても調査した。具体的には、ウンマの存在を前提とする、かつそれを実質化する、イスラーム法学の「集団的義務」の観念が、彼らのあいだでどのように表現されたかを検討し、以下のようなひとまずの結論を得た[ 図書 ] すなわち、前近代中国ムスリムがイスラームを「聖人」の「教」として表現する際、ウンマ全体に課される「集団的義務」は、個人の倫理規範に還元されて説明された。その原因は、ウンマや「集団的義務」の内在的論理——その未遂はムスリム共同体全体の罪となるという、集団の善悪（救済される社会、されない社会）の観念——が、中国伝統思想に照らして説明できなかつたからだろう。儒教にも、善なる社会を築こうとする「治国平天下」の理念はあったが、それはあくまで個人の修養（格物致知、誠意正心、修身齐家）の延長でしかなかったのではないか。

### 【4】

王静齋『古蘭經譯解』におけるスーフイズムについての解釈を検討し、彼がスーフイズムをめぐる中国ムスリムの伝統的解釈やイスラーム世界の思想潮流にどのように反応していたかを探った。それにより、イフワーン派による中国イスラーム改革の実態の一端に迫った。結果、彼がスーフイズムに親和的な解釈をほとんど採っていなかったこと、とくに聖者崇拜には激烈に反対していたこと、その批判の際の典拠としてアールーシー（Shihāb al-Dīn al-Ālūsī, d.1854）のクルアーン注釈『意味の靈魂（*Rūh al-ma'ānī*）』（アラビア語）を利用していたことを、明らかにした。アールーシーは、サラフィー主義の先駆者であり、『意味の靈魂』は20世紀になって中国に伝来したと考えられる。

また、20世紀以前から中国ムスリムのあいだに流布していたブルセヴィー（Bursawī, d.1728）『名称の靈魂（*Rūh al-bayān*）』（アラビア語）やカーシフィー（Kāshifī, d.1504）『高貴な贈り物（*Mawāhib al-ālyyia*）』（ペルシア語）にみえる、聖者崇拜を必ずしも否定していないような記述を、王静齋が微妙に改変して、反聖者崇拜の権威的言説として援用していたことを、発見した。

加えて、イブン・アラビー（Ibn 'Arabī, d.1240）のスーフイズム思想にもとづく独特の来世論が、19世紀の著名な中国ムスリム学者馬徳新（1874年没）によって中国イスラームの思想空間に導入されたこと[ 学会発表；雑誌論文 ] しかしそれは『古蘭經譯解』には継承されなかったことを確認した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

中西 竜也、「近代中国ムスリムのイスラーム法解釈——非ムスリムとの共生をめぐる」、『東洋史研究』、査読有、74-4、2016、1-35

中西 竜也、「馬徳新とイブン・アラビーの来世論——19世紀中国ムスリムの思想変相」、『西南アジア研究』、査読有、86、2017、55-78

〔学会発表〕(計 7 件)

中西 竜也、「近代の中国ムスリムによる「不信者」との共生の努力——馬聯元、馬安、義、達浦生のイスラーム法解釈」、『中国ムスリム研究会第二十七回定例会、上智大学四谷キャンパス10号館301号室、2014年6月28日

中西 竜也、「中国ムスリムとそのイスラーム」、『東方アジアにおけるイスラームの諸相—思想・美術・コレクション』、慶応大学日吉キャンパス来往舎2階 大会議室、2014年11月9日

Nakanishi, Tatsuya, "Swaying between the Umma and China: The Survival Strategies of Hui Muslims during the Modern Period", Wild Spaces and Islamic Cosmopolitanism in Asia, National University of Singapore, January 14, 2015

川本 正知、黒岩 高、中西 竜也、「スーフイズムの「中国的」諸相——ムジャッディディーヤ科研中国北西部地域調査報告」、『日本中央アジア学会年次大会、KKR江ノ島ニュー向洋会議室、2015年3月28日

Nakanishi, Tatsuya, "Chinese Muslims and Islamic Reformism during the Modern Period", Reconnecting China with the Muslim World (organized by Zhenghe International Peace Foundation, and University of Malaya Malaysia-China Friendship Association), University of Malaya (Kuala Lumpur, Malaysia), August 12, 2015

中西 竜也、「日中戦争期中国ムスリムとウンマ」、『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)フィールドネット・ラウンジ企画ワークショップ「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家：20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階マルチメディアセミナー室306(東京都府中市)、2016年1月9日

中西 竜也、「馬徳新とイブン・アラビーの来世論——十九世紀中国ムスリムにおけるイスラーム新思想の受容と展開」、『奈

良女子大学史学会第 61 回大会（奈良女子大学 N 棟 201/202 教室） 2016 年 11 月 23 日

〔図書〕(計 4 件)

杉山正明 編、京都大学大学院文学研究科、『続・ユーラシアの東西を眺める』、2014、xliii+160 (中西 竜也「20 世紀初頭オスマン語による中国のムスリム事情紹介」xxviii-xxxii, xli-xliii+119-160)

Haiyun Ma, Chai Shaojin, Ngeow Chow Bing eds., Kuala Lumpur: Institute of China Studies, University of Malaya、*Zhenghe Forum Connecting China and the Muslim World*, 2016、216 (Nakanishi, Tatsuya, "Chinese Muslims and Islamic Reformism during the Modern Period", pp. 123-134)

和田 郁子、小石 かつら編、昭和堂、『他者との邂逅は何をもたらすのか』、2017、203 (中西 竜也「イスラームと漢語の邂逅——「回回」の変容」、158-161)

藤井淳編、京都大学人文科学研究所、『古典解釈の東アジア的展開——宗教文献を中心として』、2017、305+112 (中西 竜也「デインが「教」になるとき——前近代の中国ムスリムにおける「宗教」と「共同体」」、23-56)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中西 竜也 (NAKANISHI, Tatsuya)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号： 40636784

### (2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者  
なし

(4) 研究協力者  
なし